

エウエン語における母音の挿入と脱落について

鍛治広真

kajih@l.u-tokyo.ac.jp

キーワード: エウエン語 ツングース諸語 母音 語幹 接尾辞 交替

要旨

本論文ではエウエン語（ツングース諸語）にみられる異形態交替現象、特に母音が挿入または脱落を伴う例を分析する。原則的には子音クラスタを回避するために母音が挿入されるが、一部に例外的な交替現象が見られる。それら例外現象にはいずれも、nで終わるN語幹とそれ以外の語幹の区別が関わっている。

1. はじめに

エウエン語¹では語幹に接尾辞が付加される場合、その組み合わせによって異形態の交替現象が見られる。本発表では母音が挿入または削除される交替パターンとそれに関連する現象を扱う。なお音素は以下の通り。

(1) 子音音素 /p, t, č[te], k, b, d, j[dz~dʲ], g[g~ɣ], m, n, ŋ[n], ŋ, s[s~ɕ~h]², w, j[j~ç], l, r/ (17種類)

(2) 母音音素

RTR	短母音 /ɪ a o u/	長母音 /ɪɪ aa uu oo ia/
ATR	短母音 /i e ø u/	長母音 /ii ee uu øø ie/

2. 母音調和

ATRの母音とRTRの母音は同一語中に共起しないという母音調和の現象がある。表1に示すように接尾辞に現れる母音の種類(ATR/RTR)は語幹に現れる母音に依存して交替する。a~eの交替を示す母音はAで代表し、同様にi~iはI、o~øはO、u~uはUで表す。

¹ 本稿は2017年3月30日におこなわれたユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会にて筆者がおこなった報告「エウエン語の接尾辞付加と交替現象を引き起こす音韻的条件」に基づき修正を加えた物である。本稿で扱うのはインジギルカ川流域モマ地区の話者の方言で中央方言に属する。

² [h]は語頭および母音間に現れる。この環境では[h]がよく聞かれるが、自由変異として[s~ɕ]が現れることも可能である。

表 1 母音調和による接尾辞異形態交替

	RTR 語幹	ATR 語幹
-stA (派生接辞)	kučuka-sta「やや小さい」	egje-ste「やや大きい」
-ñUn (共格接辞)	sil-ñun「スープと」	ikiri-ñun「骨と」
-rOOčIn (派生接辞)	tar-roočim「あのような」	er-rөөčim「このような」

表 2 短母音の弁別素性³

	a	ɪ	o	u	e	i	ə	u	A	I	O	U
high	-	+	-	+	-	+	-	+	-	+	-	+
back	(-)	(-)	(+)	(+)	(-)	(-)	(+)	(+)	(-)	(-)	(+)	(+)
ATR	-	-	-	-	+	+	+	+				
round	-	-	+	+	-	-	+	+	-	-	+	+

母音の素性を表2のように考えると、接尾辞に含まれる母音は[ATR]に関して未指定のAIOUであり、語幹に付加される際に語幹に含まれる母音と同じ値の指定を受けるという規則として述べることができる。

- (3) A [α ATR]/ V_{stem} [α ATR]
- (4) I [α ATR]/ V_{stem} [α ATR]
- (5) O [α ATR]/ V_{stem} [α ATR]
- (6) U [α ATR]/ V_{stem} [α ATR]

3. 子音クラスタの回避

音節構造は(7)のとおりで、子音連続は音節境界が間にある場合に 2 子音連続が現れるのみで、音節頭や音節末の子音クラスタは存在しない。

(7) 音節構造⁴ (C₁) V₁ (V₂) (C₂)

子音語幹に接尾辞を付加することにより子音クラスタが生じてしまう場合は、母音の挿入か子音の脱落により子音クラスタが回避される。子音の脱落はN語幹(nで終わる語幹)に起こり、母音挿入はN語幹以外の語幹で起こる。

3.1. 一般規則による母音挿入

拙論(2010, 2011)では所有を表す形容詞の-lkAnの異形態について、挿入母音を接尾辞の一

³ 丸括弧で括った[back]の値は剩余的であり、[round]の値と同じ値を自動的に取る。[round]が剩余的で[back]に依存すると考えることも可能であるため、表2にはどちらも含めている。

⁴ V₁V₂の組み合わせは第1節で述べた長母音。

部として分析した。それに伴い、語幹の種類を「母音語幹」「N 語幹」(n で終わる語幹)「硬口蓋子音語幹」「その他の子音語幹」の 4 種類に分類した。

(8)

語幹の種類	-lkAn の異形態
母音語幹	-lkAn が付く
硬口蓋子音語幹	-llkAn が付く
その他の子音語幹	-AlkAn が付く
N 語幹	語幹末の/n/が脱落し、-lkAn が付く

しかし、表 3 に示すように語幹との境界に母音が見れるのは接尾辞-lkAn の個別の特徴ではなく、子音クラスが回避されるという音節構造の理由により、-lkAn 以外の接尾辞でも条件が合致すれば規則的に母音挿入が起こる。

表 3 子音クラスを避けるための母音挿入と子音脱落

	基底	実際の形	
母音語幹	ikiri-Č ⁵	ikiri-č	(骨-具格)
子音語幹	kalim-Č	kalim-a-č	(鯨-E-具格)
	okeň-Č	okeň-i-č	(乳-E-具格)
	toŋ-Č	toŋ-i-č	(錫-E-具格)
	segep-Č	segep-e-č	(黒テン-E-具格)
N 語幹	oran-Č	ora-ň	(トナカイ-具格)
母音語幹	ikiri-lkAn	ikiri-lken	(骨-propriative)
子音語幹	kalim-lkAn	kalim-a-lkan	(鯨-E-propriative)
	okeň-lkAn	okeň-i-lken	(乳-E-propriative)
	toŋ-lkAn	toŋ-i-lkan	(錫-E-propriative)
	segep-lkAn	segep-e-lken	(黒テン-E-propriative)
N 語幹	oran-lkAn	ora-lkan	(トナカイ-propriative)

挿入される母音を E で代表する。E の実現形は a~e~i~i の 4 通りの可能性があり、語幹の ATR/RTR の区別と語幹末の子音の種類(調音位置)に左右される。語幹末が硬口蓋子音⁶であれば狭母音 i~i が現れ、それ以外の子音であれば広母音 a~e が現れる。

本稿では子音語幹と接尾辞の境界に現れる母音は接尾辞の一部に含めないことにする。すなわち(9)のような分析をする。接尾辞の異形態交替条件の記述において、「硬口蓋子音語幹」

⁵ Č は N 語幹に付く際に ŋ で現れ、それ以外の語幹に付く際にはとで現れる。

⁶ 硬口蓋子音は次の 4 つ: /t/ [tɛ], /j/ [dʒ~dʒ], /ŋ/ [ŋ], /j/ [j~ç]

「その他の子音語幹」という調音位置による分類は必要なくなる。

(9)	語幹の種類	-lkAn の異形態
	母音語幹	(-E)-lkAn が付く
	硬口蓋子音語幹	
	その他の子音語幹	
	N 語幹	語幹末の/n/が脱落し、-lkAn が付く

E が実施にどのような母音で現れるかは規則的に決定される (3.3節(18)~(21))。

表 4 挿入母音 E の弁別素性

	A	I	O	U	E
high	-	+	-	+	
back	(-)	(-)	(+)	(+)	(-)
ATR					
round	-	-	+	+	-

3.2. N 語幹における子音の脱落

N 語幹は子音で終わる語幹であるが、接尾辞付加によって子音クラスタが発生し得る場合に母音挿入が起こらず、(10)(11)のように語幹末の子音が脱落することによって子音クラスタを回避する。⁷

(10) oran-č̣ > ora-ñ (トナカイ-具格)

(11) oran-lkAn > ora-lkan (トナカイ-propriative)

これらの現象は N 語幹だけに見られるが、3.1 節の母音挿入規則と同じく「子音クラスタの回避」という一般的な規則の表れである。

3.3. まとめ

子音クラスタの回避を伴う接尾辞付加プロセスにをまとめると次のとおりである。特に②以降が子音クラスタ回避に直接関わる規則群である。

① 接尾辞頭音の同化⁸

(12) č̣ > ñ / n _

⁷ ŋm (犬)、joeden (物) 及び借用語は例外で、他の子音語幹と同じタイプの交替をする。

⁸ 本論文は母音の出没についての議論を主眼とするため、接尾辞頭子音の同化についての詳細は稿を改めて論じたい。

(13) Č > č / elsewhere

② 子音クラスタの回避(i) 母音挿入に先立って n の脱落が起こる

(14) Vn]_{stem-C#} > V]_{stem-C#}

(15) Vn]_{stem-CCV} > V]_{stem-C.CV}

③ 子音クラスタの回避(ii) 母音挿入

(16) VC]_{stem-C#} > VC]_{stem-E-C#}

(17) VC]_{stem-CCV} > VC]_{stem-E-C.CV}

④ E の[high]の値は直前の子音により決定される。

(18) E [+high]/C[+palatal]_

(19) E [-high]/ C[-palatal]_

⑤ E の[ATR]の値は語幹に含まれる母音により決定される。(一般的な母音調和の規則)

(20) A [α ATR]/ V_{stem} [α ATR]

(21) I [α ATR]/ V_{stem} [α ATR]

表 5 子音クラスタ回避を伴う接尾辞付加プロセス

基底	①	②	③	④⑤
ikiri-Č	> ikiri-č			
kalım-Č	> kalım-č		> kalım-E-č	> kalım-a-č
økeñ-Č	> økeñ-č		> økeñ-E-č	> økeñ-i-č
toǰ-Č	> toǰ-č		> toǰ-E-č	> toǰ-i-č
segep-Č	> segep-č		> segep-E-č	> segep-e-č
oran-Č	> oran-ñ	> ora-ñ		
ikiri-lkAn				> ikiri-lken
kalım-lkAn			> kalım-E-lkAn	> kalım-a-lkan
økeñ-lkAn			> økeñ-E-lkAn	> økeñ-i-lken
toǰ-lkAn			> toǰ-E-lkAn	> toǰ-i-lkan
segep-lkAn			> segep-E-lkAn	> segep-e-lken
oran-lkAn		> oran-lkAn		

4. 例外的な母音挿入・脱落

ここで扱う 2 つの交替現象はある点では音韻的条件があると言ってもよいが、全ての語に適用されるような一般的規則とは言えない。第 3 節でとりあげた現象との共通点は、N 語幹

の場合とそれ以外の語幹の場合で音の挿入・脱落の起こり方が異なる（N 語幹にしか起こらないというケースも含む）という点である。

4.1. N 語幹における語幹交替（語幹内の母音の脱落）

共格接尾辞（-ñUn）や離格接尾辞（-KIč⁹）を付加した際、N 語幹の末尾の n だけでなくその前の母音も落ちる。ここで N 語幹を 2 つに分類する：N1 型＝次末音節が開音節、N2 型＝次末音節が閉音節。N 語幹においてのみ、開音節の連続する場合に母音の脱落が起こっている。同じように開音節が連続する母音語幹においては、このような母音脱落は起こらない。

表 6 N1 語幹における母音の脱落

語幹末	母音	有声子音		無声子音	N1 型	N2 型
		阻害音、 流音、接 近音	鼻音			
主 骨	ikiri	sil	kalim	segep	o.ran	sir.kan
		スープ	鯨	黒テン	トナカイ	ナイフ
共	ikiri-ñun	sil-ñun	kalim-ñon	segep-ñun	or-ñun	sirka-ñon
離	ikiri-gič	sil- gič	kalim- ģič	segep-kič	or-ģič	sirka-ģič

以下の条件を満たす場合に語幹の母音脱落が起こる。

- 条件 I：語幹が 1 型の N 語幹であること（次末音節が開音節）。
- 条件 II：接尾辞頭音が歯茎音以外の子音であること
- 条件 III：接尾辞が 1 音節以上の長さを持つこと

次の例は 3 つの条件を満たしており語幹（oran）の母音（a）が脱落する。

- (22) oran-WU¹⁰ > o.ran.mu > orn.mu > or.mu （トナカイ-1人称単数所有）¹¹
- (23) oran-ñUn > o.ran.ñun > orn.ñun > or.ñun （トナカイ-共格）
- (24) oran-KIč > o.ran.ģič > orn.ģič > or.ģič （トナカイ-離格）

次の例は N2 型語幹であり、I の条件を満たしておらず、語幹の母音が脱落しない。

- (25) sirkan-WU > sir.kan.mu > sir.ka.mu （ナイフ-1人称単数所有）
- (26) sirkan-ñUn > sir.kan.ñun > sir.ka.ñun （ナイフ-共格）

⁹ K は語幹末音の有声性、鼻音性に同化して k-g-ŋ の交替を示す。

¹⁰ W は母音語幹につくと w、子音語幹に付くと U として現れる。N 語幹に付くと n と融合して m となる。

¹¹ 母音が脱落したことによりクラスタになるため、n が脱落する。(25) のような子音クラスタでない例での n の脱落については検討を要するが、本稿では「歯茎音以外の子音の直前で脱落する」と仮定する。

(27) sirkan -KIč > sir.kan.ŋič > sir.ka.ŋič (ナイフ-離格)

次の例は N1 型だが II の条件を満たしておらず、語幹の母音が脱落しない。

(28) oran-lkAn > o.ran.lkan > o.ra.lkan (トナカイ-propriative)

(29) oran-dUIA > o.ran.dula (トナカイ-処格)

次は N1 型だが III の条件を満たしておらず、語幹の母音が脱落しない。

(30) oran-W > oran-m > ora-m (トナカイ対格)

(31) oran-Č > oran-ň > ora-ň (トナカイ-具格)

I-III の条件を満たす場合に、母音が脱落しなかったとしても不可能な音節構造になるわけではなく (o.ran.mo)。ほかの現象にも拡張して当てはめることができるような条件ではなく、この現象だけに関わる個別的な規則である。

4.2. 所有者人称接辞が N 語幹に付く場合に現れる母音

次に挙げる接尾辞は母音を持つ形と持たない形で交替する。この母音の現れる位置は語幹と接尾辞の境界ではなく、3.1 の一般規則による挿入母音とは異なる。

表 7 所有者人称接辞の付いた語形

語幹末	母音	有声子音		無声子音	N1 型	N2 型
		阻害音、 流音、接 近音	鼻音			
	ikiri	sil	kalim	segep	oran	sirkan
	骨	スープ	鯨	黒テン	トナカイ	ナイフ
1単	ikiri-w	sil-ɔ	kalim-ɔ	segep-u	or-mɔ	sirka-mɔ
2単	ikiri-s	sil-a-s	kalim-a-s	segep-e-s	oran-sɪ	sirkan-sɪ
3単	ikiri-n	sil-a-n	kalim-a-n	segep-e-n	oran-nɪ	sirkan-nɪ
1複包括	ikiri-t	sil-a-t	kalim-a-t	segep-e-t	oran-tɪ	sirkan-tɪ

表 8 所有者人称接辞の異形態

	1 単	2 単	3 単	1 複包括
母音語幹	V-w	V-s	V-n	V-t
子音語幹	VC-U	VC-A-s	VC-A-n	VC-A-t
N1 語幹	-mU	Vn-sɪ	Vn-nɪ	Vn-tɪ
N2 語幹	V-mU	Vn-sɪ	Vn-nɪ	Vn-tɪ

N 語幹の例を除いて考えると、それぞれの接尾辞の基底の形は子音のみの-W~-WU、-s~-sI、-n~-nI、-t~-tI となる。これら 4 つの接尾辞は、音韻的な条件では規定できない特異なグループ形成している。

5. 結語

本論文では母音の挿入・脱落現象の分析を通して、音韻的な条件のみで適用される一般的な規則（3 節）と、特定の語彙項目にのみ適用される個別的な規則（4 節）のどちらにおいても N 語幹とそれ以外の語幹の区別が振る舞いを大きく左右することを示した。

参考文献

- 鍛治広真 (2010) 「エウエン語の形態音韻論における数詞の特異性」『東京大学言語学論集』30. 71-82. 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部言語学研究室
- 鍛治広真 (2011) 「エウエン語の所有を表す接尾辞 -lkAn」『北方言語研究』2. 35-45. 北海道大学大学院文学研究科

Vowel Epenthesis and Omission in Ewen

KAJI Hiromi

kajih@l.u-tokyo.ac.jp

Keywords: Ewen, Tungusic, vowel, stem, suffix, alternation

Abstract

The present paper aims to describe morphophonologically conditioned vowel epenthesis and omission in Ewen, a Tungusic language spoken in the Russian Far East. Vowels are inserted into the stem-suffix boundary to avoid consonant clusters in the suffixation process, with the exception of n-stems (stems which have *n* in the stem final position). N-stems show some irregularity in terms of allomorph alternation. When an n-stem is involved, stem final *n* is deleted to avoid a consonant cluster, and then vowel epenthesis does not occur. Also, a certain vowel in n-stems will be deleted under a particular condition. This kind of vowel omission never occurs in other types of stems.

(かじ・ひろみ 東京大学)